

■実践事例 4 【肢体不自由】小学校・第3学年（Dさん）

脳性まひのある児童に対し、身体の動きとコミュニケーションの力を高めることを目指した自立活動の指導

1 指導内容を設定するまで

実態把握



学級担任

Dさんは、脳性まひがあり、日常生活において、運動・姿勢保持の困難があります。移動は、車椅子で自走することや、歩行器を使用してゆっくり歩行することができます。

Dさんが歩行する際の下肢の動きに関して、**医療機関から情報**はありますか。



特セン所員



主治医から、「Dさんは、下肢に筋緊張があり、特に足首から股関節にかけての筋緊張が強いため、足首をほぐすために、歩行器による定期的な歩行運動が必要です。」と助言を受けています。

理学療法士や作業療法士と、身体の動きに関する情報を共有しておくとな参考になるかもしれませんね。
それでは、**コミュニケーションの様子**についてはどうですか。



Dさんにとって身近な大人である私や保護者の方には、要求や興味があることを話すことができますが、慣れていない相手や場所では、緊張から声を出すことができない様子が見られます。

肢体不自由のある児童生徒は、言語や上肢の障がいにより自己表現全般に困難が見られることもあり、場面によっては緊張による不随意運動から発声・発語が難しくなる場合も見受けられます。



Dさんは家庭では、自分から積極的に話をするようです。

保護者からの情報はとても参考になります。肢体不自由のある児童の実態把握は、身体の動きだけでなく、日常生活の様子なども、本人や保護者と丁寧にやり取りをすることが大切です。



課題の整理

目標の設定



Dさんは、自分から歩行運動をすることに消極的なため、定期的に歩行運動に取り組もうとする意欲を高めたいと考えます。



また、自分から考えを言葉で周囲に伝えることが少ないため、他の教師や友達に合図で知らせたり、依頼を伝えられたりすることが必要であると考えます。



Dさんが自ら歩行運動に取り組んだり、他者とやり取りしたりできる力を高めることは、将来、Dさんが周囲の援助を活用して、自分のやりたいことを実現しようとするにつながりますね。

項目の選定



「身体の動き(4)(5)」の内容を中心に、生活場面において周囲と円滑なコミュニケーションができるよう、「コミュニケーション(4)」などの項目と関連付けて指導したいと考えます。



身体の動きだけではなくコミュニケーションなど、肢体不自由による学習上や生活上の困難に関わる項目を選定することが大切です。

指導内容の設定



Dさんに定期的な運動を促すことができる活動を設定したいと思います。Dさんが、目的意識を持ち、意欲的に取り組める活動として、給食の時間に使う道具を運ぶ係活動を考えました。



Dさんが**目的や活動内容に見通しを持てるようにすることで主体的に取り組めるように**指導内容を工夫することが大切です。



自分から必要な事柄を伝えることができる教師を増やすために、学級担任以外の教師に届ける場面も設定します。運んだ道具を自分から手渡すという目標を、Dさんと共有したいと思います。



慣れていない教師がいることを想定して、Dさんから伝える際には、スイッチ教材を使用できるようにし、発声・発語以外の方法でも、自分から伝えることができるように工夫を行います。



Dさんに必要な定期的な歩行運動だけに取り組むのではなく、コミュニケーションの目標を関連付けた活動内容とすることで、学習上や生活上の困難の改善・克服につなげることが大切です。

2 指導内容等の整理

情報収集	Dさんの障がいの状態や長所、課題等について情報収集（詳細は27ページ）					
実態把握	自立活動の区分に即した整理	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き
		脳性まひ（下肢まひ）がある。 健康状態は良好で、生活のリズムは確立している。	物事に固執することがある（エレベーターが動き出す様子を見たい、エレベーターの相乗りを嫌う等）。	特定の教師との関わりが中心で、会話は一方的になりやすい。 慣れない相手から話しかけられた際、緊張から応じられないことがある。	車椅子や歩行器で、目的の場所まで一人で移動することができる。 教師や大人から聞いた話を時間も記憶している。	車椅子で自走できるため、歩行器での歩行には消極的である。 歩行器を使う際は、両足を交互に出して歩行できるが、内反足が強く両足伸展時に交差することがある。
課題の整理	- 両足首の拘縮や変形を防ぐために、歩行器による定期的な歩行運動が必要である。 - 慣れた教師とのやり取りが多いことから、慣れていない教師や友達に自分から気持ちを伝える機会を増やしていく必要がある。					
目標の設定	- 目的の場所に、自分から歩行器による歩行運動で移動する。 - いろいろな教師に、必要な事柄を声やスイッチ教材で自分から伝える。					
項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成 (2) 病気の状態の理解と生活管理 (3) 身体各部の状態の理解と養護 (4) 障害の特性の理解と生活環境の調整 (5) 健康状態の維持・改善	(1) 情緒の安定 (2) 状況の理解と変化への対応 (3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	(1) 他者とのかわりの基礎 (2) 他者の意図や感情の理解 (3) 自己の理解と行動の調整 (4) 集団への参加の基礎	(1) 保有する感覚の活用 (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応 (3) 感覚の補助及び代行手段の活用 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能 (2) 姿勢保持と運動・動作の補助手段の活用 (3) 日常生活に必要な基本動作 (4) 身体の移動能力 (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行	(1) コミュニケーションの基礎的能力 (2) 言語の受容と表出 (3) 言語の形成と活用 (4) コミュニケーション手段の選択と活用 (5) 状況に応じたコミュニケーション
指導内容の設定	【人(1)、身(4)(5)、コ(4)(5)】		【人(1)、コ(4)(5)】		【身(4)(5)】	
	① 歩行器で特別教室まで移動し、教師に頼まれた物を取りに行く。運んだ物を届ける際に自分から声やスイッチ教材で伝える。		② 給食に使う配膳台を運ぶ役割を理解し、教室まで運んだ際、自分から声やスイッチ教材で伝える。		③ 目的の場所を理解して、歩行器を使い、自分から移動することができる。	

※赤枠に関する指導については、「3 指導の実際」を参照

3 指導の実際

◇ 指導内容①に関する指導

- ・学級担任や慣れていない教師から、特別教室にある2～3色のビーンズバッグを運ぶように依頼する。
- ・教室から特別教室まで歩行器を使って歩行する。
- ・特別教室にある籠から、依頼された色のビーンズバッグを自分で選び、教室に戻る。
- ・教室に戻った際に、自分から声やスイッチ教材で教師に合図し、依頼された物を運んできたことを伝えるようにする。(教師は、合図があるまで、振り向かず待つ。)
- ・教師にビーンズバッグを手渡し、依頼した色と合っていることを確認する。



【ビーンズバッグを取り出す様子】

◇ 指導内容②に関する指導

- ・自分で、けん引用のロープを持って、給食配膳台まで歩行器を使って移動するようにする。(支援する教師は、左右交互に足を出すように言葉掛けをする。)
- ・周囲に気をつけて、ゆっくり給食配膳台を運ぶ。(配膳台を運ぶ際は、安全に運べるように必ず教師が見守る。)
- ・教室に入室する際、声やスイッチ教材により、給食配膳台を運んできたことを教師や友達に知らせるようにする。



【給食配膳台を運ぶ様子】

【指導のポイント】

- 歩行器での歩行の安定のため、シューホーン型AFO（靴べら型の短下肢装具）やオーバーシューズを使用すること。
- 歩行や身体状態については、医療機関などの専門機関と定期的に連携し、歩行器を使った歩行の仕方や足首のほぐし方の助言を参考にする。
- コミュニケーションの代替手段として、スイッチ教材を活用すること。
- 報告ができなかった場合でも、その都度指摘せずに、できたことを褒めることで活動やコミュニケーションに安心感や達成感を味わえるようにすること。
- Dさんの意欲を引き出すため、Dさんの好きなキャラクターを歩行器やけん引用のロープに取り付けるなど、教材を工夫すること。

【成果と課題】 [○…成果 ▲…課題]

(1) 児童の変容

- 目的が明確な歩行運動を日常的に継続して、達成感が得られるように活動を工夫したことで、自分から歩行器を使って歩行しようとする意欲が高まった。
- スイッチによる代替手段を使ったコミュニケーションの方法を継続することで、慣れていない教師と、自分から関わろうとする場面が見られるなど、Dさんが関わることができる教師の幅が広がった。

(2) 指導の評価・改善

- ▲ 関わる人の幅を広げるため、同年代の友達と関わる場面を増やすようにする。